



大仙産日本酒「宵の星々」の完成報告

2月21日、益満先生とゼミナールメンバー6名が、学部長と学長へ表敬訪問しました。

みなおと1月号に、益満ゼミの活動を紹介してもらっていますので、ご覧下さい。今回は、日本酒「宵の星々」が完成して、事前予約販売分が完売し、3月5日、6日に限定1000セット、1セット9900円で販売されるのを前にした訪問でした。

20歳以上で、お酒を飲むことができる、また秋田の日本酒をこよなく愛する方はぜひ試しに飲んでみてください。



学部長室



学長室



左から順に、益満先生、伊藤千穂さん、進藤佳音さん、泉好香菜さん、山本学長、夏井聖来さん、成田樹生さん、佐々木珠莉さん

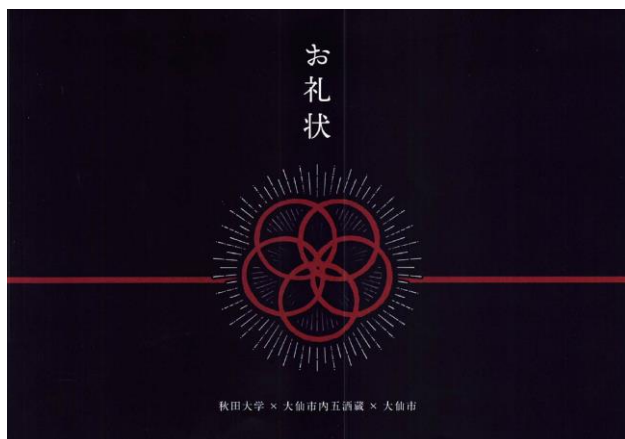
秋田大学 × 大仙市内五酒蔵 × 大仙市
大仙酒蔵統一コレクション
宵の星々
3月5日発売 酒蔵限定1,000セット

DAISEN SAKAGURA COLLECTION

秋田 出羽 千代 利根

酒造りを未来へ繋げる。大仙市の酒蔵

秋田大学、大仙市内の五つの酒蔵、大仙市が田植えから販売まで協力して造った。
オーガニック・メイド・イン大仙の日本酒です。
連携によって生まれたバラエティ豊かなレベルの高い大仙市の日本酒をどうぞお楽しみください。



2/22 第7回模擬授業フェスティバルを開催

2月22日(火) 13:00～14:10 に第7回模擬授業フェスティバルを Zoom にて開催しました。全面オンラインでの開催は初めてになります。そのせいもあってか、参加は鯿同好会の1グループのみとなりました。20名の参加でした。

1 グループのみとはいえ、鯿同好会の模擬授業は事前録画した教材を使用し、その中には秋田県消防学校の専門家の方も登場するもので、それを活用した授業展開で、大変工夫されたものでした。講評の武田篤先生、櫻庭直美先生、鎌田信先生からも高く評価され、最優秀賞が授与されました。



- 鯿同好会：◎松淵 朗子（教育実践コース・3年次）、堀井 明日香（英語教育コース・3年次）
- 中心課題：現物教材を用いた導入動画～防災リュックを用いた「自助」による防災～
- 設定理由：コロナ禍においては、授業内での ICT の導入やそれを用いた教材づくりが盛んになった。既存の教材を用いるだけでなく、教員が担当する学級に応じた教材を自分自身で作ることができるような能力も必要であると考え。そこで、小学校4年生「地震からくらしを守る

人々」の単元の導入動画及びそれを用いた授業動画を作成した。

- 学校種、教科等、学年、単元名：小学校4年生、社会科及び総合的な学習の時間「地震からくらしを守る人々」



模擬授業は教員採用試験で行われることが多いものですので、学生のみなさんは是非そのわざを磨いていただきたいところですし、今後はICTを活用した授業展開が求められていくことも考えられます。



＜参加学生による感想＞

1年の締めくくり

教育実践コース3年次 松渕 朗子

昨年、「大学の授業以外で何かしたい」と考え、初めて参加した模擬授業フェスティバルから1年が経ちました。

今回原案にしたのは、2021年度後期のICTを用いた社会科指導法の講義で構想したものです。防災リュック等の「現物教材を用いた授業の導入動画」を作るというテーマで練った案でしたが、完成した動画は原案とはかけ離れたものになりました。「小学校4年生には難しい」「単調で飽きる」「セリフが固い」と試行錯誤し、最終的には外部講師を招くという案で発展させることができました。

教育実習で実際に子どもと触れ合い、昨年充分に考えることができなかった「子どもが主体」という点を省みることができたと思います。私は、2度の模擬フェスを通して、自分の成長を感じることができました。模擬フェスは、1年間の学びの振

り返りと次年度への課題を見つけることができるイベントだと思います。また、オリジナルワークシートの作成、単元全体を見据えた授業構想等、昨年の模擬フェスによって成長できた面は、1年間の大学での学びを支えてくれました。

例年と異なる状況の中でも、開催、運営、評価をしてくださった先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。原案と一緒に作ってくれた後輩たち、動画撮影に協力してくださった研究室のみなさん、昨年から助言し続けてくださった加納先生、授業づくりにご協力いただいた堀井さん親子。本当にありがとうございました。

今年は寂しい模擬フェスとなってしまいましたが、来年は活気ある「フェスティバル」になることを心から楽しみにしています。

ふとしたきっかけが大きな学びに

英語教育コース3年次 堀井 明日香

きっかけ

英語科の私が何故、社会科で模擬授業フェスティバルに出たのか？松渕から、今年も模擬授業フェスティバル出ること、小学校の防災についてやるという構想を聞き、「私のお父さん、今消防学校で働いてるよ。何か聞いてみようか？」と軽く持ち掛けたことがきっかけです。社会科の授業づくりはあまり経験がなく不安でしたが、2人で構想すると、アイデアが溢れてきてとても楽しかったです。外部講師として教材動画に出演した父との動画撮影も、良き思い出となりました。

ICTと外部講師の活用は綿密な準備が必須

今回の模擬授業では、授業の導入動画とまとめの動画を自分たちで作成しました。導入動画教材では、動画構成やセリフ、活用方法など、動画を踏まえて児童が課題を持てるよう、さまざまな角度から練り上げる必要がありました。動画教材づくりは、教材として効果的に働くよう修正・編集をする必要があることを学びました。また、まとめの動画制作にあたっては、撮影前に児童の反応を伝え、外部講師からフィードバックを頂きました。このことから、外部講師との綿密な「報・連・相」が不可欠であると強く感じました。

TTの強み

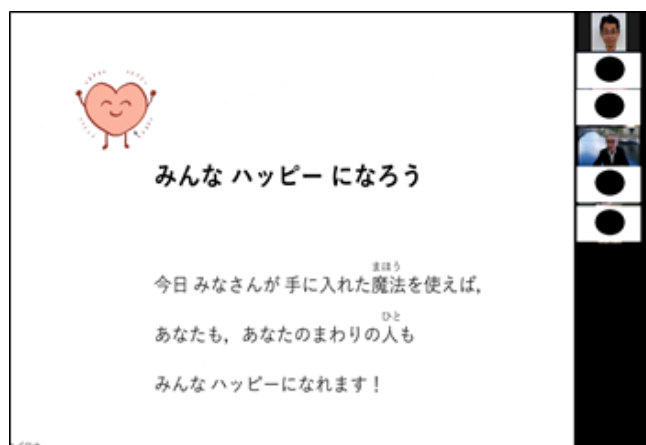
今回の模擬授業では、松渕は専攻の知識を生かして授業づくりを先導し、私は人脈や英語劇の経験を生かして授業づくりをサポートしました。お互いがお互いの長所と短所を理解し、自然と役割を分担しながら補い合えたのが私たちの強みだと感じています。

最後に、授業づくりと動画制作をリードしてくれた松渕に感謝しています。ありがとう。

令和3年度「秋田大学における障害者の生涯学習モデル講座」の実施報告

令和2年度より、特別支援教育研究室では、秋田県生涯学習課からの要請を受けて「障害者の生涯学習支援モデル事業」に取り組んでいます。

令和3年度は、大学における生涯学習講座の講義内容や障害特性に配慮した実施方法などを検討するための試行的取組みを、昨年度に続いて行いました。今年度は、以下のように全10回の講義を、教育文化学部の先生方に協力を頂きながら行っています。



オンライン講義の様子

この講座では、秋田県内の特別支援学校に協力を頂き、広く参加者を募りました。各回概ね、4名以上の障害のある方が参加されました。講座開始当初、参加者からは、Zoomを用いたオンライン講義に対する戸惑いが多く感じられました。しかし、回を重ねるにつれて、リアクションボタンを上手く使い、チャットボックスを使ったやり取りができるなど、オンライン講座に慣れた様子が見られるようになりました。

参加者の各講座に対する感想には、以下のようなものがありました。

・第2回より：

こども発達・特別支援講座 前原和明

「講義の最後で紹介していた本が気になったので買いました。ホセ・ムヒカ世界でいちばん貧しい大統領（角川文庫）です。これから読んでいきます。」

・第4回より：

「僕は3年前くらいから家計簿をつけるようになりました。その月に使ったお金が分かって良かったです。毎日欠かさずつけています。」

・第5回より：

「講座を受けて、いろんな形を組み合わせで描くという発想がなかったので新しいことを学べて楽しかったです。今日、学んだことを生かしてこれからもいろんな絵を描いていきたいです。」

これらの感想から、生涯学習講座を通じて、参加者に新たな知識の獲得、更なる学びの意欲の喚起、生活場面への応用などの肯定的な事柄を提供できたと考えています。

次年度（令和4年度）の生涯学習講座では、大学で生涯学習講座を提供する目的や意味などを検討するために、引き続き講座のプログラム検討のための取組みを試行的に実施していくこととしています。



対面講義の様子

開催回	日時	実施方法	タイトル	講師	参加者
第1回	2021.10.9	オンライン	オリエンテーション／Zoomの使用法	前原和明	6人
第2回	2021.10.16	オンライン	みんながハッピーになるための心理学	武田 篤	7人
第3回	2021.10.23	オンライン	幸せな国・デンマークの人々と学び	原 義彦	5人
第4回	2021.11.6	オンライン	家計管理・金銭管理を考えてみよう	堀江さおり	5人
第5回	2021.11.20	オンライン	形や色について学ぼうー絵の基本を楽しく学びますー	長瀬達也	5人
第6回	2021.11.27	オンライン	煮干しになっている魚を、自分で解剖して体のつくりを調べてみよう！	石井照久	4人
第7回	2021.12.4	対面	歌の背景を考え、表情をつけて歌いましょう	石原慎司	4人
第8回	2021.12.11	対面	体を使って考えよう！算数・数学	加藤慎一	4人
第9回	2022.1.22	オンライン	身近なサイバー空間の脅威と情報セキュリティ	林 良雄	5人
第10回	2022.2.12	オンライン	秋田のまつり	志立正知	7人

2/16 附属学校学部共同委員会総会及び研修会を開催

2月16日(水) 15:00～16:45 標記の会を Zoom にて開催しました。学部教員、附属教員、144名の参加がありました。15:00～16:25 は、「大学におけるダイバーシティ教育」と題して、東京大学副学長(ダイバーシティ教育担当)の伊藤たかね先生の講演が行われました。その後、教科別・校種別等の部会を部会毎に 16:25～16:45 で開催しました。



伊藤先生は東京大学大学院情報学環特任教授でもあり、専門分野は言語学です。特に英語と日本語を研究対象とし、主に「語」のレベルに焦点をあて、形態論・語彙意味論に関する理論言語学的研究と脳波測定等の実験的研究を両立し、実践してこられました。主要著書としては、伊藤・杉岡(2002)『語の仕組みと語形成』研究社、伊藤(編)(2002)『シリーズ言語科学1 文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会、長谷川、ラマール、伊藤(編)(2008)『こころと言葉—進化と認知科学のアプローチ』東京大学出版会などがあります。伊藤先生は、日本学術会議連携会員、日本英語学会理事並びに会長、日本言語学会評議員なども務められています。東京大学では1989年より2021年まで、英語及び言語学関係の授業を担当され、リベラルアーツ教育に深く関わってこられました。

講演では、日本の大学のダイバーシティの状況について、国立大学の女性学生・教員・学長、外国人教員、留学生、障がいのある学生、25歳以上の入学者の数・比率、経済的環境、経済的困窮・ジェンダー・地域による格差に関する統計等を踏まえて、極めて同質性が高いことが指摘されました。

大学はダイバーシティに欠ける環境であることから、意図的にその偏りに気づかせ、偏りから解放する教育を行うことが必要になります。教育が変われば将来の社会が変わります。思考の制約となっている「無意識の前提」、自分にとってのあたり前に気づくこと、その制約から思考・判断を解放する力を持つこと、他者との出会い、理解しようとする努力することによって自己を相対化する

力、これらをリベラルアーツ教育によって実現します。意識的な理解によって無意識のバイアスを変えることは難しいことを認識することも必要です。そのことを踏まえた意識的な思考・判断を心がけ、異なるものを尊重する姿勢を作ります。

授業では、理論編で、専門家による体系的な講義を行い、実践編では、それぞれの教員の専門に引きつけて、実践的に違いを体験する演習などを行います。具体例として、伊藤先生の専門である留学・国際交流体験、外国語教育、手話(日本手話と日本語対応手話)が触れられました。

異なる体系について学ぶことで、異なる視点の存在に気づきます。自分が前提していることが、他の人にも当然の前提にはならない可能性を知り、異なる体系を知ること、自分の体系への理解も深まります。表面的な相違の背後にある共通点を見いだす力も養成されるのです。

あらゆる科目にダイバーシティの視点を反映させること、さまざまな科目で、様々な形でダイバーシティが取り上げられることが重要であるとされました。



本学部・研究科、附属学校園においてもダイバーシティの視点は重要です。社会全体が優勝劣敗、適者生存、効率至上、競争至上主義に陥り、マイノリティ、少数派、社会的弱者を切り捨てる傾向が強くなる中ではダイバーシティは失われていきます。地球温暖化の中で生物多様性が失われていくことも同様でしょう。社会を見通す力、見えないものを見ようとする意思と力を持って、社会的課題にもきちんと向き合い、行動する態度を身に付けていくことが求められます。

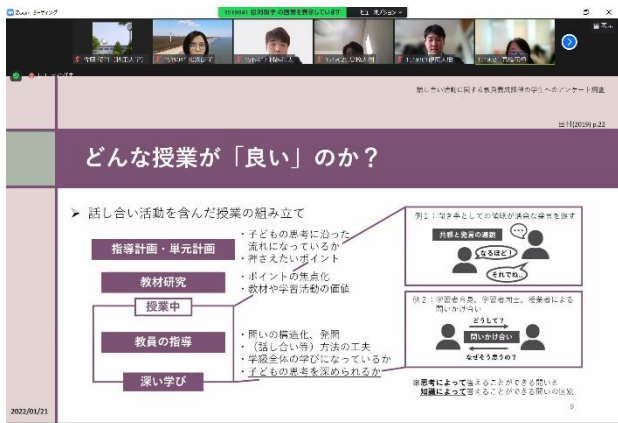
2/18-19 第13回あきたの教師力高度化フォーラムを開催

2月18日（金）9:30から開会行事を行い、午前中9:50～11:40は、秋田県総合教育センターとの共催行事を行いました。117名ほどの参加がありました。

最初に、学部3年次に開設されている教職発展演習に参加している学生の代表として、以下の2グループが、演習で発表した報告を行いました。

○「話し合い活動」に関する研究―教員志望学生へのアンケート調査から

発表者：高橋大翔、高橋花樺、松渕朗子、村越玲太、伊東大樹



○学校現場でみるユニバーサルデザイン7つの原則

発表者：伊藤光希、大野優、加藤菜月、長雄彩生、長澤未姫、野村恵梨子



教職発展演習では、総合教育センターの研修員の方数名が、授業づくり、学級づくり、生徒指導などのテーマで学生に実践経験を伝えています。今回も、研修員の方から学生の発表に対して温かいコメントがなされました。

続いて、総合教育センターの研修員の方が、2月3日の総合教育センター主催教育研究発表会において行われた研修員の発表の中から、代表として以下の2名の方の研究報告が行われました。

○中学校数学科における、論理的に考察する力を高める指導の工夫―「スリーステップシート」を活用した説明し伝え合う活動を通して―

発表者：利 敬一郎先生

○知的障害特別支援学校中学部生徒が主体的に活動に取り組む姿を目指した指導の工夫―自尊心を育むための自立活動の実践を通して―

発表者：山田賢子先生

2月19日（土）12:40～16:05は講演・シンポジウム・閉会行事が行われました。113名ほどの参加がありました。

12:40～13:50 講話：一人ひとりの子どもを主語にする学校教育をめざして

講師 荒瀬克己（教職員支援機構理事長）



14:00～15:50 シンポジウム「個別最適な学びと協働的な学びとの一体的な充実を図る」

石川 政昭（秋田県教育庁教育次長）

秋田県のふるさと教育

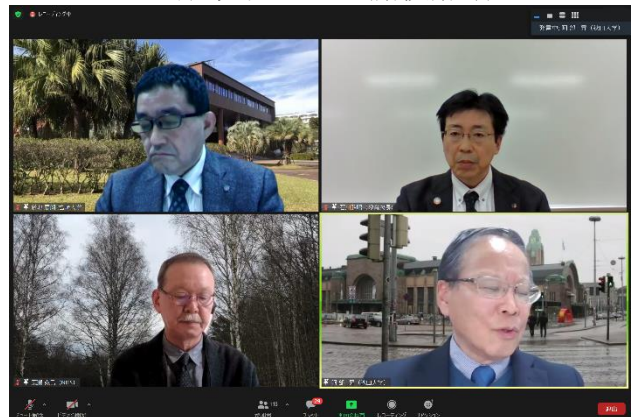
新地 辰朗（宮崎大学副学長）

学びを深化・転換させる授業に向けて―新たな学習環境とメディア活用の創意工夫

阿部 昇（秋田大学教職大学院特別教授）

わかりにくさとその克服

モデレーター：荒瀬 克己 氏〔講演講師〕



左上：新地氏、右上：石川氏、右下：阿部氏、左下：荒瀬氏

2月18日11:50～12:50は、教職大学院生中間発表会（ストマス1年、現職院生1年）を行いました。基本的に、すべての報告は15分発表、10分質疑でした。

- 浅野匡平：グループ活動における司会の有無が協働学習への参加形態や児童の授業評価に及ぼす影響
- 阿部倫己：小学校社会科における思考ツールを活用した学習問題・課題をつかむ段階の指導方法に関する研究
- 嶋崎友貴：思春期ダウン症児におけるこだわり行動の背景の考察とその支援
- 平塚達也：双方向の関わり合いを重視した交流及び共同学習の実践
- 大塚邦子（現職院生）：学級数の少ない障害種の特別支援学級担任への支援の在り方について
- 今井彩（現職院生）：特別支援学校高等部における現場実習を中心とした進路指導の検討
- 佐々木健真：中学校理科におけるICTを活用した授業改善についての研究

2月18日13:50～15:50は、教職大学院生成果発表会①（ストマス2・3年）を行いました。

- 本田和也：小学校理科におけるプログラミング教育の円滑な導入に関する一考察－ICT機器とアンブレラ教材の活用を通して－
- 伊藤真里奈：小学校音楽科における音の表現活動－打楽器を用いた教科等横断的な学習の有効性－
- 大関隆貴：ICTを用いた中学校体育器械運動の授業における学習者の認知－タブレットで自分の動きを確認し動きの気づきを促す－
- 高橋海渡：観察・実験に対する興味を深めるための授業デザイン－興味の構造分析を踏まえて
- 小野彰斗：小学校国語科における『説得型スピーチ』の指導方法の研究－ディベートを生かしたスピーチの構造的性と対話性の向上を図る－
- 工藤唯花：図画工作科における発想の広がりをもつ指導言の研究
- 佐藤大星：小学校理科における見方・考え方を働かせるための授業設計と授業の在り方について
- 清水里沙：中学校段階における批判的読みの指導方法に関する臨床的研究
- 新山壮一郎：小学校体育における運動有能感を高める授業づくり－マット運動の授業実践を通して－
- 庄司航：小学校社会科の身近な地域の学習における社会的な見方・考え方を働かせる授業開発
- 三保翔：小学校体育のマット運動における運動有能感を高める授業づくり

- 相馬舜平：小学校外国語科における児童の方略的能力を育む授業づくりに関する実践研究－帯活動におけるSmall Talkを通じて－

2月19日（土）10:00～11:40は、教職大学院生成果発表会②（現職院生マネジメント、現職院生2年）を行いました。

- 江幡隆弘：高等学校における「ふるさと教育」を核とした学校経営戦略
- 小態大樹：生徒の主体的な学習を促す、中学校社会科における指導方法の工夫
- 近野祥子：協働性を育み組織を活性化させるOJLの推進方策
- 佐藤茂樹：特別支援学校における交流及び共同学習推進の効果的方策～チェックシートの活用を通して～
- 正木節：秋田県教職キャリア指標を活用した校内研修の在り方
- 吉川寿朗：学校とまちづくり団体との持続可能な連携・協働体制の再構築～「みさぽーと」との活動を通じた地域とともに歩む学校づくり～
- 櫻庭泰則：地域の教育資源を活用した「総合的な学習の時間」の効果的推進に関する一考察
- 工藤智史：知的障害特別支援学校に在籍する発達障害のある児童生徒の自己有用感を育む方策の検討～地域資源を活用した生活単元学習の実践を通して
- 近野勇雄：小学校における教育の情報化に向けたミドルリーダーを中心とする組織的取組に関する研究



2022 年 3 月で退任される先生方からのメッセージ

秋田大学での思い出

教育実践コース 爲我井 壽一

私は平成 18 年 4 月に秋田大学教育文化学部音楽教育講座に着任いたしました。当時は音楽の教員がまだ 6 名（現在 3 名）おりましたので、1 年目の私は講座運営等に関する仕事に慣れていないため、他の先生方よりもやや簡単な仕事や少なめな量を配分していただいた記憶がございます。これはとてもありがたい思い出の一つです。

私は茨城県出身で仕事の拠点も関東圏で育ち生活してきました。それまで東北に来たことはなかったのですが、初めて秋田に来て県内各地を旅行して秋田の大自然の美しさに触れて感動することができました。でも冬の日本海の景色の厳しさや雪の量の多さには驚きました。関東地方では絶対に体験できない事でした。このような厳しい条件の中で生活する秋田の人の我慢強さには敬服するしかありません。

秋田大学での声楽分野における教育・研究活動の中で 2 つほど思い出を振り返ってみたいと思います。まず 1 つ目は秋田市内の小学校で歌唱の出前授業を行った時の思い出です。これは知り合いの小学校の校長先生から、ご自身が 3 月で定年退職となるので、6 年生が卒業式で保護者の前でしっかりと歌う姿と歌声を聴いて自分も“卒業”したいということでの依頼でした。子どもたちへの愛情とご自分の教員生活の“最後の仕事”への強い想いを感じたので快諾いたしました。最初の 3 回は私が指導を行い、一緒に行った音楽の学生が見学と補助的な指導を行いました。そして 4 回目は学生数名が協力しながら指導を行いました。学生の自分たちだけでも指導が出来たという報告から自信を深めている様子を感じられ、実習の成果を確認することができました。その後、卒業式が無事に済ませた校長先生からお電話で「卒業式で 6 年生たちが伸び伸びと歌うことが出来ました。とても感動しました。学生さんにもお礼をお伝えください。」というご連絡を頂きました。それを学生たちに話すと大きな声を出して喜んでいる様子から自分たちの指導が役立ったことに対する満足感が伝わってきました。

2 つ目は平成 21 年度から平成 28 年度まで大学公開講座「発声法と歌唱法」を開催した思い出です。これは一般社会人を対象とした社会貢献として実施しました。本来、声楽は「体が楽器」であり、「言葉のついた音楽」であるため、日々の発声練習や歌唱練習等を行いながら中・長期的に継続し

て実行してゆかないと成果がなかなか出てこない分野です。「体が楽器」のように歌を歌うためには、スポーツを行うように歌のトレーニングを行う必要があります。“歌うこと”に関して多くの人に共通することで一番多いのは「楽しみたい」という気持ちだと思います。「学び」の中にも「楽しみ」が入っていることが“歌うこと”には大切な要素となります。特に 60 歳以上のシニア世代を対象とした声楽講座「歌は人生を楽しくする～声の出し方、歌い方のヒント～」を開催した時に、受講者に実施した 3 週間の自宅での発声練習の宿題に関するアンケート調査をした際の結果から様々なポジティブな効果があることを確認することが出来ました。例としては「声の出具合や歌唱力が向上した」「心身の健康の保持に役立つ」「声の出し方や歌い方について家族間の対話が増えて、コミュニケーションが改善した」等の成果を確認することが出来ました。この結果から、“歌うこと”は高齢者の「生活の質」に貢献できるものの一つであり、今後の高齢化社会に役立つものとなるのではないかと考えました。

もう何十年も昔の話になりますが、日本の音楽大学と大学院で学んだ後、ウィーン国立音楽大学やイタリアに留学した時期がありました。最初の留学先のウィーンで日本の音大でお世話になったヨーゼフ・ヴィット教授（J. Witt: オペラ演出家、元ウィーン国立音楽大学教授、オーストリア宮廷歌手）にご挨拶に伺った時に「声楽を深く学び演奏するためには、楽譜の裏側に隠れている作曲家の音楽的な意図を読み取り、音楽の流れを表現できるようにすることが重要です。」というアドバイスを頂きました。このヴィット先生の助言は「表側の学習（基礎）から裏側に隠れている本質的なもの（応用）を見つけ出さない。」という風に私は解釈しました。このヴィット先生のアドバイスは、私が秋田大学で声楽教育を実践する際に基本から応用に発展させるための考え方として活用させていただきました。

秋田大学では 16 年間お世話になりました。その間、様々な体験や活動をさせていただきましたこと感謝申し上げます。今後はこれまでの声楽教育・研究の成果を社会に還元するために個人的な音楽活動を行って参りたいと考えております。現在、コロナ感染拡大が収束しない状況ではありますが、これからも皆様方がご健康であり、ご多幸でありますことを祈念しております。どうもありがとうございました。

向き 不向きより 前向き

教職実践専攻 小松睦子

教職大学院での私の勤務は、ワンポイントトリリーフとしての1年間でした。私の個人的な事情からもフルタイムの勤務は1年が限界でしたので、限られた時間の中で自分に求められていることに全力を尽くそうと思いながら過ごした日々でした。ただ、この仕事が自分に向いていたのかと問われれば、おそらく不向きだと思いますが、私は「向き不向きより 前向き」を大切に生きてきましたので、どうかお許しいただければ幸いです。

昨年度までの数年間は、学部非常勤講師として授業をさせていただいたので、今年度の学部3年生や4年生の学生さんたちと教職総合基礎の授業や自主ゼミなどで再会する機会に恵まれたことがとてもうれしく、成長を実感する貴重な時間でした。

大学院では、本来なら授業や研究のみならず、友人や先輩・後輩と存分に交流し充実した2年間を送ったはずのストマスのみなさんが、長引くコロナ禍のさまざまな規制がかかる中でも前向きに学ぶ姿に勇気をもらいました。また、現職教員院生の方々の教育と向き合う真摯な姿と児童生徒への深い教育愛に日々触れ、本県教育の未来に大きな希望を感じました。

得がたい貴重な経験をありがとうございました。

この春こそ、躍動的で濃密な時間がみなさんを待っていますように・・・

お世話になりました

教職実践専攻 林崎 勝

秋田市の公立小学校を無事定年退職した後、縁あって本学に足掛け5年間通いました。最初の3年間は、前期の特別活動論を担当しました。3年目と4年目は、附属教職高度化センターに席を得、主に学部3・4年生の教職自主ゼミの企画・運営を担当しました。併せて教職大学院1年次院生のインターンシップⅠも担いました。そして本年度は、教職大学院に籍を置き、いくつかの授業とインターンシップⅡ、2月フォーラムを担当しました。以前何かの原稿にも書きましたが、本学の卒業生なので、およそ9年間、この「学び舎」に通ったことになります。

私にとって学部生時代の4年間は何を学ぶ「学び舎」だったのかはさておいて、ここ5年間は皆さんの学びを支える「学び舎」を担う一員として、

与えられた責任を果たそうと取り組んできたように思います。独りよがりだったかもしれません。

独りよがりということから思い出した文言があります。それは「自信と過信をすり替えるな!」という言葉です。20代の若造教師だった時に発せられたものでした。よほど自信(過信)たっぷりの様子だったのでしょうか、私の言動が。確かに今思い返すと、怖い物知らずでした。無知な自分に気付かず謙虚さを失っていました。そのことに気付かされた後は、気を付けながら生きてきたのですが、今もって抜けていない自分がいます。

ここ5年間お世話になったお礼として、最後に教員生活の中で大事にしてきた言葉を記して教職生活を終えます。お世話になりました。

◇児童会テーマ：今を一生懸命

◇学級目標：リンゴはかじってみなけりや分らない

◇好きな言葉：美しいものを美しいと思えるあなたの心が美しい

◇学校経営において発してきた言葉：声を出そ、リーダー一歩前へ



卒業・修了おめでとうございます

教育文化学部長・教育学研究科長 佐藤修司

今年度もまた新型コロナの影響が長く続き、2019年度、2020年度と同様に、通常の卒業式を執り行うことができず、申し訳なく思っています。本来であれば、大学全体で、保護者も、在学生も交えて盛大に卒業・修了を祝いたいところなのに、胴上げも、歓送会もままならない。大学・大学院生活の中の貴重な、かけがえのない2年間は、強弱はありつつも不自由な状況に置かれ続けたわけですので、その理不尽さに憤りを覚える人もいることでしょう。

ただ、憤りや怒り、悲しみや悔しさといったマイナスの感情だけでは、事態を良くすることはできません。場合によっては破壊的な衝動が自分の内外に向かい。事態が悪化することもあります。事態を打開するためにはその感情をコントロールすること、できれば状況を書き出して、理性的、論理的に整理し、具体的な要求、行動へとつなげていくことが必要です。そして、それを自分だけにとどめず、他者との対話や協働に努めることで化学反応が起こり、新しい発想が生まれ、仲間が増え、不可能が可能になることもあるでしょう。

ここから巣立っていくみなさんには、want と must と not のバランスの取れた生き方をしてほしいと思います。往々にして、ほとんどの人は must に追われています。世の中は、〇〇しなければならない、ことだらけです。学校に行かなければならない、というのもその一つです。親や教師、政府、社会など、誰かに命令・強制されているから、将来、食べていくため、家族を養わなければならないから、行きたくなくても行かなければならない。

現状・課題と理想・目標のギャップを埋めるといふ、合理的な行動も、そうでないと組織や自分に不利益が生じるから、逆に利益を得なければならないから、我慢してやらなければならないのだとしたら、それは他律的なものになり、被害者意識、誰かのせいで、何かのせいでこうなった、という恨み辛みにつながるでしょう。嫌なことは脳が避ける傾向があるので、忘却されやすくなります。そうでなければ心身の安定が保てなくなるからです。結果として、刺激を強め続けること、圧力を強め続けないと、同じ効果を維持できなくなります。たばこのパッケージの病気メッセージがどんどん強められていたり、値段が上げられていくのと同じ現象です。

これでは長続きしません。長続きするためには want の要素が必要です。〇〇したい、という意識、

願望、希望、期待、理想、欲求、欲望です。朝起きることも、学校に行くことも、遠足や遊びなど、楽しいことが待っていれば苦ではなく、喜んで起きたくなるでしょうし、学校に行きたくなるでしょう。当初は、学校に行きたい、と思っていた時があるはずです。その初心に返ってみると、want に気づけることもあります。将来の目標・ビジョンはできるだけ楽しくて、行き着きたくなるようなものでなくてはなりません。そして、それは利己的なものではなく、できれば利他的、公共的なものであってほしいところです。

欲求、欲望では、利己的なもの、支配欲、権力欲、金銭欲などが優位になりがちですが、他者の不幸・犠牲を前提としたゼロサム型の幸福は長続きしません。必要なのは、他者が幸福になることが自分の幸福につながる、win-win 型の幸福です。学校教員であれば子どもたち・保護者の幸福、公務員であれば住民の幸福、会社員であれば消費者の幸福、そして、社会全体の幸福 well-being、それが自分の幸福につながる。幸福は簡単に壊れる、はかないものであるとしても、他者の幸福を願い、努力する意思は簡単に壊れるものではありません。

一方で、not も重要です。want、must ばかりでは間違った方向にどんどん進んでいても気づかないかもしれません。時に、〇〇してはいけないのではない、この方向は違ってはいしないか、と立ち止まって考えることが必要です。また、時に、〇〇したくない、〇〇できない、という気持ちになることを否定する必要はありません。自分の弱さ、他者の弱さを認める優しさが重要です。何でもできるわけではないのですから、自分のやれるところに限定する。働き方改革で、所定の勤務時間を守ってしっかりと働いた後は、家族のこと、趣味のこと、健康のことなど、いろんなこととのバランスをとることも重要です。

この want と must と not の割合は、2:6:2 くらいになるのが理想的なのですが、人によって、事項によって、場合によって異なるでしょう。自分のベストバランスを見つけるようにしてください。みなさんのこれからの人生が実り豊かなものになることを強く強く祈念しています。



＜補足＞後援会向けの広報誌「ひだまり」13号に寄稿したものに少し付け足しました。

国家百年の計は教育にあり

管子に「一年の計は穀を樹(う)うるに如(し)くはなく、十年の計は木を樹うるに如くはなく、終身の計は人を樹うるに如くはなし。一樹一穫なる者は穀なり、一樹十穫なる者は木なり、一樹百穫なる者は人なり。」という言葉があります。「国家百年の計は教育にあり」という名言の元にあたるものです。山本有三の『米百俵』では、百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となるとして、学校が建てられます。100年後の国の様子、社会の様子は、教育によって作られる、また、教育を見れば予想できる、ということでもあるでしょう。

1947年に制定された旧教育基本法前文では、憲法が目指す民主的で文化的な国家の建設と、世界の平和と人類の福祉への貢献という理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである、とされていましたが、これも同じ趣旨のものと言えます。逆に、間違った教育が行われれば、その負の影響は百年以上続くでしょう。

一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にあり(元々は元旦ではなく、旧暦の春だったようで、陽春にしっかり耕さないと秋の実りが空しいということのようですが)。最初に適切な目標と計画を立てて実行することが重要であり、そのことが最終的な成果、ビジョンの実現に大きな影響を与えます。百年ともなると、一つの世代では達成できず、次世代に託すことが必要になります。今の社会状況を見ると、ツケを次世代に遺していないのか気になるところですし、課題を次世代に丸投げするのも問題です。今やれることを必ずやりぬくこと、これが現世代の責任ですし、その背中を見て次世代は育っていきます。

『米百俵』は新潟の長岡藩の戊辰戦争後の大参事・小林虎三郎の話で、そこで作られた学校の後進である旧制の阪之上尋常小学校、長岡中学校で

育ったのが山本五十六・海軍大将(1884-1943)でした。山本五十六の名言に以下のものがあります。

やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、
誉めてやらねば、人は動かじ。
話し合い、耳を傾け、承認し、
任せてやらねば、人は育たず。
やっている姿を感謝で見守って、
信頼せねば、人は実らず。

これも非常に考えさせられる言葉です。往々にして、叱れば、責めれば人を動かせる、人を変えられると思いがちですが、そんなことはありません。逆に、その人は反発したり、殻に閉じこもったり、逃げ出したりして、その人を遠ざけてしまいます。ハラスメントの責任を問われることも起こりえます。人を変えようとするのではなく、自分自身を変える必要があります。自分もそんなに簡単に変わられませんし、変われませんが、行動、言動は徐々にであるにしろ、変えることができます。甘やかすこと、放任することとは違います。自分の都合や感情、利益ではなく、相手のことを本当に心から考え、信頼して任せ、見守るところからしか、成果や成長は生まれないのです。言いたいことが10あるとしたら、8は誉めて、2は課題を指摘する、具体的に改善策を示すようにしましょう。

山本五十六の言葉はリーダーたるもの、教師たるもの、親たるものの心構えですが、自分自身への対し方についても同じことが言えるかもしれません。

これまで「みなおと」にいろいろと書いてきて、自分はできているのかと問われると、そんなに簡単にできるものではない、ということなのですが、書くこと話すことによって自分に対する戒め(いましめ)や励ましにはなっています。



新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組み

【全国】

1/30：秋田県の累計感染者数が4000人と超えて4075人となる。

*一部不明・不正確な箇所があります

2/1：全国の重症者数が800人を超え、804人となる。800人を超えるのは昨年9/30の932人以来。
1日の死者数が70人となる。70人台は昨年9/15

の 74 人以来。

2/2：全国の新規感染者数が 97000 人を超え、97464 人となる。全国の 1 日の死者数が 80 人を超えて 82 人となる。80 人を超えるのは昨年 9/9 の 88 人以来。

2/3：全国の重症者数が 900 人を超え、911 人となる。全国の 1 日の死者数が 90 人となる。90 人台は昨年 6/9 の 96 人以来。

和歌山県に、2/5 から 2/27 までまん延防止等重点措置の適用を決定。

2/4：全国の重症者数が 1000 人を超え、1042 人となる。1000 人を超えるのは昨年 9/28 の 1062 人以来。全国の 1 日の死者数が 103 人となる。100 人を超えるのは昨年 6/3 の 111 人以来。

2/5：全国の新規感染者数が 100000 人を超え、100949 人となる。全国の 1 日の死者数が 110 人を超えて 117 人となる。秋田県の累計感染者数が 5000 人を超えて 5206 人となる。

2/6：全国の重症者数が 1100 人を超え、1134 人となる。1100 人を超えるのは昨年 9/27 の 1106 人以来。

2/8：全国の 1 日の死者数が 159 人となる。150 人を超えるのは昨年 5/18 の 216 人以来。

2/9：全国の 1 日の死者数が 162 人となる。全国の重症者数が 1212 人となる。1200 人を超えるのは昨年 9/24 の 1228 人以来。

2/10：2/13 に期限を迎える 13 都県への「まん延防止等重点措置」の適用期間を 3/6 まで延長し、新たに高知県にも重点措置を 2/12～3/6 で適用することを決定。適用対象は 36 都道府県に拡大。延長する 13 都県は東京、埼玉、千葉、神奈川、群馬、新潟、岐阜、愛知、三重、香川、長崎、熊本、宮崎。秋田県の累計感染者数が 6000 人を超えて 6155 人となる。

2/11：全国の重症者数が 1340 人となる。1300 人を超えるのは昨年 9/22 の 1383 人以来。ワクチンの 3 回目接種が職域接種も含めて 1000 万人を超える。

2/15：全国の 1 日の死者数が 236 人となり、最多となる。全国の重症者数が 1403 人となる。1400 人を超えるのは昨年 9/21 の 1429 人以来。ワク

チンの 3 回目接種の全人口に占める割合が職域接種も含めて 10%を超える。

2/16：秋田県の累計感染者数が 7000 人を超えて 7191 人となる。

2/17：全国の 1 日の死者数が 271 人となり、最多となる。

2/18：2/20 が期限の関西 3 府県や北海道、福岡など 16 道府県と、2/27 が期限の和歌山のまん延防止等重点措置について、3/6 までの延長が決定。沖縄、山形、島根、山口、大分の 5 県は 2/20 の期限をもって解除も決定。重点措置の適用が続く 31 都道府県の期限はすべて 3/6 となった。

2/20：秋田県の累計感染者数が 8000 人となる。

2/22：全国の 1 日の死者数が 322 人となり、最多となる。全国の重症者数が 1504 人となる。1500 人を超えるのは昨年 9/18 の 1559 人以来。秋田県の新規感染者数が 271 人となり、最多となる。ワクチンの 2 回目接種が職域接種も含めて 1 億人を超える。

2/23：ワクチンの 3 回目接種が職域接種も含めて 2000 万人を超える。

2/25：秋田県の累計感染者数が 9003 人となる。

【秋田大学】

2/1：県外移動（全都道府県）から帰県の際の自宅待機期間が 10 日間から 7 日間に短縮（帰県日を 0 日とカウント）。10 日間は健康観察を継続。

2/10：濃厚接触者の自宅待機期間について、（旧）最終接触日から 14 日間を、（新）最終接触日を 0 日目として 7 日目まで、に変更し、健康観察期間を（旧）14 日間から、（新）最終接触日を 0 日目として 10 日目まで、に変更。

2/25-26：前期日程を実施。

【学部・研究科】

2/16：附属学校学部共同委員会総会及び研修会を Zoom で開催。

2/18-19：第 13 回あきたの教師力高度化フォーラムを Zoom で開催。

2/22：模擬授業フェスティバルを Zoom で開催。

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科 HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910 年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。